

若い学生諸君と話すことも多い。そうした中、最近はっと気付かされた事があった。私は当然の事として受け止めていた情報と体験の共有が無いことに愕然としたのである。彼らには「バブル」を体験したという認識が無い。このバブルとは勿論 1630 年代オランダで起きたチューリップ投機(当時アムステルダムは国際経済の中心地で銀行業も盛んであった)、18 世紀前半の英国に於ける南海泡沫社事件、更には 1920 年代の米国の土地・株式投機のことではない。80 年代後半に我が国で発生した土地・株式を中心にした資産バブルのことである。

戦後の我が国経済発展の経緯を解説しながら 90 年代のスタートと共に始まった長期デフレに至る過程を金融の立場から概括し、当然の事として異常なバブルの発生と崩壊についても話をした。そしてこのバブルとは具体的にどの様な経済・社会現象であったか学生諸君に尋ねてみた。なかなか回答が得られないため、彼らの周辺で実際にバブルに遭遇し悲喜こもごもの生活体験を語ってくれた人がいないか更に聞いてみたが反応はなかった。バブルは彼らが 2,3 歳から小学 1,2 年生にかけて起きており、彼らの記憶には殆ど残っていても決して不思議なことではない。親達は自分たちの体験した狂乱バブルについて子供たちに話そうとしないのであろうか。世間一般に言われるように家庭を中心としたコミュニケーションの場を作れない中、親子で情報の共有や体験の伝達の機会を持ってないままに、こうした極めて身近で、重大な経済・社会現象に付いても語り継がれないのであろうか、いずれにしても大変残念なことである。

私は学生と話をする時、出来る限り日々の生活体験や身近な経済・社会現象をつぶさに観察させ、理論との関わり方を理解させるよう心掛けている。

我が国でバブルが崩壊し始めて早くも 14 年になる。ようやく昨年春頃から、懸命な努力が実を結び、長くて先行きの見えなかった深刻なデフレ期からの脱却の可能性が見えてきた。その原因分析や対策等についてはこれまでも多くの研究・調査が行われ今後も継続されるであろう。今の学生もデフレ現象についてはそれなりの認識と体験を持ち不安の時代を生きている。その一方でバブルは彼らにとっては既に遠い過去、歴史上の出来事になっているのではなからうか。改めてここでもジェネレーション・ギャップの大きさを痛感させられた。

ある学生は、想像もつかないことだが、是非バブルを一度体験して見たいと熱意を込めて語っていた。そして、その時が来たら、親達の世代と同様、資産価格の狂乱的な上昇を当て込んで投機的行動に走るであろうかと自問自答していた。その時は多分現在のように買いたいものも買わず、防衛的消費行動に出るであろうと話していたのが大変印象的であった。バブルを知らない若い世代が今後益々急増することになる。彼らの消費者、市民としての行動様式は当然の事ながら、経済・社会に大きな影響を及ぼすことになる。今後の政策を検討したり、様々な経済予測を行う際にも、こうした視点を加味した理解が必要となる

う。

人間の行動様式は成人になればなるほど、大変保守的で且つ自分自身の体験に支配される傾向が大きい。90年代を通し今日まで日本の経済政策が欧米でしばしば批判されてきた。政策当局はここに到っても、何故インフレを心配するのか。今はインフレではなくデフレ対策を最優先に実行すべきであると彼等は強い調子で警鐘を鳴らし続けた。過去の亡霊に縛られ、デフレ対策を果敢に実行できない日本は、或る時は無能呼ばわりまでされた。正確な現状認識と危機意識に欠けると共に、政策の選択と集中が無いまま、対策は常に後手に回わり、欧米の識者には到底理解のできない事態を招いてしまった。日本の政策当局者の多くが、その生涯の大半をインフレ体験で過ごし、デフレの怖さを体得していなかったことが、事態を一層悪化させた一因とも見られる。

その生涯において、インフレとデフレの両方を体験する人はそう多くない。とりわけ社会の中核として働く期間の体験となるとなさらである。このため学習効果が生きてくる割合は低下することになる。そして、インフレにしるデフレにしる最初の体験が決定的影響力を持つことになる。こうした中、3世代も経過すると、人は又振り出しに戻って同じ道を歩むことにもなりかねない。

米国では、1920年代に発生したバブルとその前後の状況を身近で、極日常的な経済・社会現象に照準を当てて書かれた、Frederick L. Allenの「Only Yesterday」が1931年に出版された。そしてその後世界大恐慌に至る、1930年代のアメリカの恐慌を同様なタッチで、リアルに描写した、「Since Yesterday」が同じ著者によって1939年に上梓され、話題になった。我が国に於けるバブル発生並びにその序曲と崩壊、それに続く出口の見えない深刻なデフレに見舞われた経済・社会現象についても、この様な書物が登場し、世代間の情報と体験の共有や継承が、人々の生活や身近な事柄を通して行われることも必要であろう。